

ドイツ語形容詞の強変化・弱変化について

On Strong and Weak Declensions of German Adjectives

甲斐崎 由典
Yoshinori KAISAKI

Abstract

German is said to have better retained syntactic features derived from Proto-Germanic, including the strong and weak adjectival declensions. However, a close examination of the development of the mixed declension reveals that there was some restructuring in the nominal inflectional system and a new compositional way of expressing morphosyntactic information was established. This paper also tries to show that the characteristics of this development can be thought of as an example of exaptation within the grammaticalization theory.

Keywords: German adjective, strong and weak declensions, grammaticalization, exaptation

キーワード: ドイツ語形容詞、強変化・弱変化、文法化、外適応

1. はじめに

形容詞の強変化と弱変化⁽¹⁾という区別は、印欧語の中でゲルマン語にだけ発達したといわれている。⁽²⁾ ドイツ語では現在に至るまでこの区別が維持されているが、冠詞類つきの名詞句では冠詞類に合わせていわゆる弱変化と混合変化がさらに区別される。

この弱変化と混合変化の違いは男性単数主格と中性単数主格・対格の3か所だけである。冠詞類によってはこの3か所で性数格語尾がつかないので、弱変化をもとに、この3か所だけ強変化語尾に入れ替えたものが混合変化である。

現状のドイツ語文法を理解するだけなら以上のような説明で十分であるが、他のゲルマン語と比較したり、ドイツ語の形容詞変化の変遷をたどってみると、ドイツ語はゲルマン語本来の強変化・弱変化の区別をよく保存しているのではなく、むしろ革新的なシステム変更を経て現在に至っていることがわかる。

本研究では、ドイツ語の形容詞変化の対照比較や歴史を通して、ドイツ語が生み出した独自の体系を確認し、そうした文法変化がいわゆる文法化理論の枠組みでどのように捉えられるか

考察する。

2. 現代ゲルマン諸語の強変化・弱変化

現代ゲルマン諸語のなかでドイツ語とアイスランド語は、3つの文法性や4つの格の区別を維持しており、形容詞の語尾変化も強変化と弱変化できちんと別の表が作れる。

表1 現代ドイツ語の形容詞の語尾変化

強変化	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	er	es	e	e
属格	en	en	er	er
与格	em	em	er	en
対格	en	es	e	e

弱変化	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	e	e	e	en
属格	en	en	en	en
与格	en	en	en	en
対格	en	e	e	en

混合変化	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	er	es	e	en
属格	en	en	en	en
与格	en	en	en	en
対格	en	es	e	en

表2 現代アイスランド語の形容詞の語尾変化⁽³⁾

強変化	単数			複数		
	男性	中性	女性	男性	中性	女性
主格	ur	t	-	ir	-	ar
属格	s	s	rar	ra	ra	ra
与格	um	u	ri	um	um	um
対格	an	t	a	a	-	ar

弱変化	単数			複数		
	男性	中性	女性	男性	中性	女性
主格	i	a	a	u	u	u
属格	a	a	u	u	u	u
与格	a	a	u	u	u	u
対格	a	a	u	u	u	u

アイスランド語は古い時代の語尾をよく保っており、母音が水平化して似たような語尾が増えたドイツ語と異なり、強変化と弱変化の区別はすべての性数格で保たれている。

とはいえ、このように古い形式を比較的よく保っているアイスランド語にもゴート語にも、混合変化というパラダイムは見られず、ドイツ語独自の発達であることがわかる。

混合変化は、不定冠詞 *ein* や否定冠詞 *kein*、さらに *mein* などの所有冠詞に続く形容詞で出てくるパラダイムであるが、こうした冠詞類に続く形容詞の変化を他のゲルマン語と比べてみると、またドイツ語の独自性が明らかとなる。

表3 冠詞類に続く形容詞の語尾（中性単数）⁽⁴⁾

		強変化語尾		弱変化語尾
ドイツ語	不定冠詞	主格	<i>ein neues Haus</i>	
		与格		<i>einem neuen Haus</i>
	所有冠詞	主格	<i>mein neues Haus</i>	
		与格		<i>meinem neuen Haus</i>
	定冠詞	主格		<i>das neue Haus</i>
		与格		<i>dem neuen Haus</i>
オランダ語	不定冠詞		<i>een nieuw huis</i>	
	所有冠詞			<i>mijn nieuwe huis</i>
	定冠詞			<i>het nieuwe huis</i>
デンマーク語	不定冠詞		<i>et nyt hus</i>	
	所有冠詞			<i>mit nye hus</i>
	定冠詞			<i>det nye hus</i>
アイスランド語	無冠詞	主格	<i>nýtt húsi</i>	
		与格	<i>nýju húsi</i>	
	所有冠詞	主格		<i>nýja húsið mitt</i>
		与格		<i>nýja húsinu mínu</i>
	定冠詞	主格		<i>nýja húsið</i>
		与格		<i>nýja húsinu</i>

混合変化というと、弱変化と違っている男性単数主格と中性単数主格・対格の3か所だけに目がいきがちである。しかし上の表のように他の格形も含めて比べてみると、不定冠詞と所有冠詞をいわゆる不定冠詞類と一括して考えたのでは明らかにならない、いわば交差した特殊性が明らかとなる。

すなわち、他のゲルマン語では不定冠詞に続く形容詞は強変化するのに対し、ドイツ語では男性単数主格と中性単数主格・対格「だけ」強変化する。逆に、所有冠詞に続く形容詞は（上表の）すべてのゲルマン語で弱変化といえるが、ドイツ語では男性単数主格と中性単数主格・対格で強変化が出てくる。つまり、他のゲルマン語とドイツ語を比べると、所有冠詞に続く形容詞の語尾変化はだいたい同じ（弱変化）だが、不定冠詞に続く形容詞の語尾変化は大幅に違う（強変化のはずがほとんど弱変化）ことがわかる。

3. ドイツ語の強変化・弱変化の変遷

前節で確認した、現代ドイツ語の強変化・弱変化の使い分けの特殊性は古い時代にはなかった。

ゲルマン語は、ロマンス祖語であるラテン語のような言語が残っていないため、ゲルマン祖語の状況を参照することは不可能である。しかし強変化・弱変化の使い分けに関しては、古期ドイツ語どころか中高ドイツ語までさかのぼれば以前の使い分けの状況がわかり、そしてそれはゴート語をはじめ他のゲルマン語の古い時代と同じものなので、それをゲルマン語本来のものとして問題ないと思われる。

まず、現代ドイツ語では冠詞類の種類によって弱変化と混合変化が区別されるが、そもそも冠詞類は比較的あとになって発達したものである。冠詞類の発達以前は、名詞に付加されるのはもっぱら形容詞であり、それが名詞に呼応して性数格を表示していた。これが印欧語全般の状況であるが、ゲルマン語だけはゲルマン祖語の形成過程で、形容詞が表示する項目として、現代語では冠詞類が担っている「限定・非限定」の区別が加わったと考えられている。

なぜゲルマン語でだけ、またなぜ限定・非限定の語形による区別が発達した（必要となった）のかは、前述のとおりゲルマン祖語が不明のため憶測の域を出ず、解明は困難である。しかしながら、この新しい限定性の区別のために、ゲルマン語が名詞にもともとあったn-語幹変化を採用したことははっきりしている。

n-語幹変化自体はゲルマン語独自のものではない⁽⁵⁾が、n-語幹変化の名詞はゲルマン語では、動作主名詞などの人をさす名詞や、形容詞や動詞から抽象名詞を作る生産的な形式として発展したと考えられている。⁽⁶⁾このような機能を持つn-語幹名詞と同じ語尾の形容詞には、たとえばKarl der Großeの(der) Großeのように、名詞や人名に同格補足語としてつけられ、ある人物の特徴を際立たせてその人物の特定を容易にする、つまり名詞を限定する機能が発達していくことが考えられる。⁽⁷⁾こうしてゲルマン語には、性数格に加えて限定性も表す弱変化があらたに発達し、もともとの強変化は非限定の場合という区別が定着したと考えられている。⁽⁸⁾

このような「強変化は非限定・弱変化は限定」という本来の区別を反映し、古高ドイツ語では、不定冠詞のあとは強変化、所有冠詞や定冠詞のあとは弱変化がくることがふつうであり、現代ドイツ語と違って、冠詞類の語尾に左右される使い分けではなかった。一方、強勢アクセントが語幹に固定されて以来、ドイツ語では変化語尾の弱変化がつねに進んだ。中高ドイツ語では弱変化を中心に同形の語尾が増加し、また特に複数で強変化と弱変化の語形の違いが薄れていく。さらに初期新高ドイツ語では、広範な語末音消失の影響も加わって、形容詞語尾の語形の違いが意識されにくくなったのか、強変化と弱変化の出現がかなり混乱してくる(Demske 2001: 75-89)。

表4 古高ドイツ語の形容詞の語尾

強変化	単数			複数		
	男性	中性	女性	男性	中性	女性
主格	er	az	iu	e	iu	o
属格	es	es	era	ero	ero	ero
与格	emu	emu	eru	em	em	em
対格	an	az	a	e	iu	o

弱変化	単数			複数		
	男性	中性	女性	男性	中性	女性
主格	o	a	a	on	un	un
属格	en	en	un	ono	ono	ono
与格	en	en	un	om	om	om
対格	on	a	un	on	un	un

表5 中高ドイツ語の形容詞の語尾

強変化	単数			複数		
	男性	中性	女性	男性	中性	女性
主格	er	ez	iu	e	iu	e
属格	es	es	er	er	er	er
与格	em	em	er	en	en	en
対格	en	ez	e	e	iu	e

弱変化	単数			複数		
	男性	中性	女性	男性	中性	女性
主格	e	e	e	en	en	en
属格	en	en	en	en	en	en
与格	en	en	en	en	en	en
対格	en	e	en	en	en	en

表6 ドイツ語の強変化と弱変化の変遷⁽⁹⁾

	古高ドイツ語	初期新高ドイツ語	現代ドイツ語
不定冠詞	強変化	強変化または弱変化	弱変化 (一部強変化)
所有冠詞	弱変化	弱変化または強変化	弱変化 (一部強変化)
定冠詞	弱変化	弱変化または強変化	弱変化

すでに複数での文法性の区別も消失しており、このような状況では他の多くのゲルマン諸語のように語尾の水平化が進みそうであるが、ドイツ語ではそうならなかった。16世紀後半から17世紀にかけて、今度は限定・非限定という意味的な使い分けでなく、冠詞類の語尾の形、つまり形態論的な強語尾・弱語尾の使い分けが確立した (Demske 2001: 87)。⁽¹⁰⁾

この新しい形態論的な語尾の使い分けのなかで、強変化の単数男性属格と単数中性属格は注目に値する。中高ドイツ語まで-esというかなり音形のはっきりした語尾を維持していたにもかかわらず、形態論的使い分けが定着すると、弱語尾である-enに置き換えられてしまった。⁽¹¹⁾これは名詞そのものに強語尾-[e]sがつくためであるが、その根底にあるのはMonoflexion（唯一語尾表示）、つまり強語尾は名詞句内に1度だけ、という発想である。ここにきてドイツ語は、名詞句において各語が独自に語形変化するのではなく、名詞句全体で調整をとりながら効率よく性数格を表示するようになったことがわかる。

こうしてドイツ語は曲用語尾の大幅な弱化を経ながら、古高ドイツ語からの4つの格の区別を失わなかった。⁽¹²⁾各構成要素の語尾が弱化したので名詞句内の他の語句を援用し、ただし強語尾は重複して使わない、という方式の確立は、なにやら人工的な印象さえ与える。他の多くのゲルマン諸語では単純に語尾弱化と同時に格変化や文法性の区別が消失していったことを考えると、いっそうドイツ語の独自性が感じられる。そのような変化が生じた理由の解明⁽¹³⁾も大変興味深いのが、本論文ではこのあと、このような変化は文法化理論の枠組みでどのように扱うことができるか考察する。

4. 文法化理論での扱い

「文法化grammaticalisation」という明確な術語を与えられたのはMeillet（[1912] 1921）にさかのぼるが、もっぱら言語の通時的変化との関連で取りざたされていた時代を経て、言語類型論や認知言語学やその他さまざまな分野でひろく文法化理論が研究されるようになって30年ほどが経過した。

このように応用範囲が広がった学問分野の常であるが、さまざまな言語からありとあらゆる文法化現象が指摘され、またその説明のために多数の新概念が提唱されている。

4. 1. Monoflexion（唯一語尾表示）の本質

ここでもう一度初期新高ドイツ語で完成した、現代語と同じ形容詞の強語尾・弱語尾の使い分けの意義を考えてみたい。

まず明らかなのは、限定か非限定かという限定性の区別の消失である。すでに古高ドイツ語初期から定冠詞、ついで不定冠詞が発達し、また必須成分となってきており、限定性は冠詞だけで別に表せるようになっていた。というわけで形容詞だけに注目すると、限定性という意味的な要素を失ったわけで、文法化の度合いは進んだことになる。

Renneberger-Sibold（2010a, 2010b）によれば、前述のMonoflexion（唯一語尾表示）の定着により、冠詞・形容詞・名詞の結束性が高まり、名詞枠Nominalklammerが形成されたという。この名詞枠はいわゆる動詞の枠構造と同じく、名詞枠の構成要素が離れていても有効なので、これがドイツ語特有の長い冠飾句の形成につながったという。確かに、アイスランド語はドイツ語以上に強変化と弱変化をよく保存しているが、古くからのシステムがそのまま維持されて

いるためか、ドイツ語式の長い冠飾句は見られない。またスウェーデン語などでは定冠詞つきの名詞句に形容詞を入れる場合、定冠詞+形容詞+定冠詞つき名詞となり、いわば定冠詞ふたつで挟み込むような構造になるが、やはりドイツ語のような長い冠飾句は見られない。ここでいう名詞枠とは、単に構成要素が配列上枠を形成しているだけではなく、Monoflexion（唯一語尾表示）により語尾どうしが実は束縛し合っていることが重要なのである（Renneberger-Sibold 2010b: 723）。

この考えをもとに、各構成要素ではなく、名詞句全体で文法化の度合いをみると、形容詞から失われた限定性の区別は冠詞に移動しただけであり、全体として文法化の度合いは以前と変わらないことになる。それどころか、Renneberger-Siboldが述べるとおり、この変化の結果比較的長い冠飾句の形成が可能になったとすると、そのような統語的新機軸を獲得したことになる。

ここで注意したいのは、長い冠飾句の形成という新機軸を実現するために、新しい形式が発達したわけではないことである。形式の上では以前からある冠詞類+形容詞+名詞の結合で変わらず、しかも曲用語尾は弱化が進んだあとである。ただ一点Monoflexion（唯一語尾表示）のパラダイムが確立といういわば地味な変化が起こっただけである。

4. 2. 文法化の尺度

ある形式の文法化がどれだけ進んでいるか、あるいはそもそも文法化現象と考えていいのか検討する際に、Lehmann（2002: 108ff.）が提案した6つのパラメータは非常によく引き合いに出される。⁽¹⁴⁾

表7 文法化度のパラメータ⁽¹⁵⁾

	範列的 (paradigmatic)	統辞的 (syntagmatic)
重点性 (weight)	↓完全度 (integrity)	↓構造スコープ度 (structural scope)
結束性 (cohesion)	↑範列度 (paradigmaticity)	↑結合度 (bondedness)
可変性 (variability)	↓範列的可変度 (paradigmatic variability)	↓統辞的可変度 (syntagmatic variability)

↓は文法化が進むと低下するパラメータ、↑は上昇するパラメータを表す。

これらのパラメータを使って、前節で指摘した形容詞のMonoflexion（唯一語尾表示）の文法化を検討してみる。

まず、すでに形容詞の曲用語尾であったものの変質が問題ということは、（範列的）完全度、範列度、統辞的可変度は変化していないといえる。

残りの3つのうち、範列的可変度は考えやすい。表6の注9で述べたように、Monoflexion（唯一語尾表示）が確立する前は、強語尾か弱語尾かという選択には自由度があった。その後そうした自由度が失われたということは、範列的可変度の低下であり、文法化が進んだといえる。

構造スコープ度とは、ある形式が影響を及ぼす範囲のことである。たとえば、英語の「助動詞」haveとbeは、「持っている」や「～である」という本動詞として目的語や補語と文全体を構成しているときに比べると、完了形や受動形として述語だけを構成している場合、構造スコープ度が低い、つまり文法化の度合いが高いことになる（Lehmann（2002: 128））。

ここで問題となるのは、構造スコープ度を検討する際、形容詞の語尾だけに注目するのか、名詞句全体で考えるのか、という違いである。形容詞の語尾だけ注目すればなにも変化はないといえる。しかし名詞句全体で考えた場合、前節で述べたように名詞枠が形成され、長い冠飾句が可能となったのであり、長い冠飾句とはまさに影響範囲が広がったこと、すなわち構造スコープ度が増加したということである。名詞枠という新機軸を考慮に入れるなら、当然この後者の結論、つまり下がるべきパラメータが上昇した、ふつうの文法化とは逆向きの発達ということになってしまう。⁽¹⁶⁾

逆に（統辞的）結合度は、形容詞の語尾だけ注目すれば変化ないが、名詞句全体で考えると、Monoflexion（唯一語尾表示）や名詞枠というのは（統辞的）結合度の増加と考えられ、今度は順当に文法化が進む方向にパラメータが増加したことになる。

このように構造スコープ度と（統辞的）結合度では、形容詞の語尾に注目するか名詞句（名詞枠）全体に注目するかで評価が変わってしまう。

4. 3. 外適応

外適応exaptationは生物進化論から採り入れられた言葉である。他に再文法化regrammaticalization、機能刷新functional renewal、反文法化degrammaticalization、過小分析hypanalysisといわれることもある。⁽¹⁷⁾ これだけ呼び名があるということは、それだけ定義もあることになるが、いずれも「再分析reanalysisが起きて、あまり重要でない文法要素が別の機能を獲得してより生産的な形態素となる（Traugott（2004: 133））」ことをさしている。ちなみに元の生物進化論では、たとえば保温の機能しかなかった鳥の羽根が、空を飛ぶという今まで存在しなかった機能を獲得した場合に外適応または前適応という。

ドイツ語形容詞の強変化・弱変化の使い分けの変質は、まさにこの外適応とはいえないだろうか。強勢アクセントの固定により音形の弱化が進み、また冠詞の発達により限定・非限定を表示する機能も弱まり、初期新高ドイツ語期になると語尾の使い分けがかなり混乱してきた。ふつうであればあとは音形を失って消え去るだけである。ところが、冠詞に語尾がついていれば弱語尾、そうでないときだけ強語尾と、いわば冠詞の語尾の引き立て役に特化することによって、名詞枠という新たな機能の成立に寄与した。語尾が弱体化して単独での性格格表示が難しくなったので複数の要素の組み合わせで示そう、という単純な分担化が進んだのではなく、それまで見られなかったような長い冠飾句が可能となったのである。ただし、ここで新たな機能のために新たな文法形式が生み出されたのではなく、もともとあった形容詞の語尾変化のパラダイムが再利用されている。⁽¹⁸⁾

5. おわりに

ドイツ語形容詞の語尾変化の変質を外適応の例とするかそうでないか、理論的構築物の定義の問題であるから、その議論だけ深めても意味がない。しかしながら、この変質と同時に確立したとみられる名詞枠、すなわち現代ゲルマン諸語の中でドイツ語に特徴的な長い冠飾句の発達は重要である。特に分詞を中心とする冠飾句は、日本語などのいわゆるOV言語の関係詞節(連体修飾節)と語順などの共通部分が多く、それはまた定形が後置される従属接続詞節についても同じことがいえるので、名詞枠の確立過程はドイツ語のOV言語化という広範な問題とかわってくる。

今後の課題としては、不要になりつつあったひとつの文法形式が他の文法形式と結んで新しい文法形式に変質した同種の現象の探索と分析だけでなく、名詞枠の発達がドイツ語の文法体系の中でどのように動機づけられ位置づけられるのか、文法化理論に限定することなく様々な視点から検討する必要があるだろう。

【注】

- (1) 本稿では単に「強変化」「弱変化」とあれば、すべて形容詞の強変化・弱変化をさすものとする。
- (2) スラブ諸語の長語尾形・短語尾形やバルト諸語の単純形と限定形など、形容詞語尾のパラダイムが複数あるのはゲルマン語独自ではない。
- (3) アイスランド語では形容詞の語形により実際には様々な語尾変化パターンがあるが、ここではもっとも語数の多いパターンを代表例としてあげた。
- (4) 名詞の格変化は消失し、形容詞の性数語尾もかなり簡略化されたオランダ語やデンマーク語では「強変化語尾」「弱変化語尾」という分け方はもはや意味をなさないが、ここでは比較のため起源にしたがって区別した。またアイスランド語には不定冠詞はないので無冠詞の語形をあげた。
- (5) たとえばラテン語 *homo, hominis* など。
- (6) Vgl. Sonderegger (1979: 101ff.).
- (7) Vgl. Törnqvist (1974: 319ff.), Ramat (1981: 78ff.).
- (8) Vgl. Behagel (1923: 170f.).
- (9) Demske (2001) 82ページの表12をもとに作成。ただし本表はおもな組み合わせをまとめたもので、網羅的ではないことに注意されたい。初期新高ドイツ語までは強語尾と弱語尾の選択の自由度が高かったため、たとえば定冠詞のあとに強変化語尾が見られることもある。本論文ではそうした詳細には立ち入らない。Vgl. Brinkmann (1969), Behagel (1923: 169-225), Braune (1987), Paul (1998), Ebert et al. (1993). 現代ドイツ語の特定の形容詞における揺れについては、vgl. Sahel (2005), Wiese (2004), Beaudoin-Lietz/Plews (2010).
- (10) ただし中高ドイツ語の頃から、冠詞類の語尾形に合わせた使い分けも見られる。Vgl. Behagel (1923: 191).
- (11) この歴史的事情をくめば、現代ドイツ語で形容詞の強変化とされるパラダイムも実は混合変化である(表1参照)。
- (12) ただし4つの格それぞれに別の語形を維持しているのは、男性名詞の単数や人称代名詞の一部のみである。
- (13) Vgl. Ronneberger-Sibold (2010a), Szczepaniak (2010), Demske (2001), Ebert (1993).
- (14) このパラメータに言及した文献はおそらく多数にのぼると思われるので、ここでは各パラメータ

の解説は繰り返さない。「オリジナル」である Lehmann (2002b: 108ff.) の他、日本語では宮下 (2006: 26ff.)、ドイツ語では Szczepaniak (2009: 19ff.) や Girnth (2000: 86) などを参照。また Norde (2009: 123ff.) は反文法化 *degrammaticalization* の分析のために、6つのパラメーターを1次文法化 *primary grammaticalization* と2次文法化 *secondary g.* で区別して詳細な検討を加えている。

(15) Lehmann (2002b: 110) を元に作成。日本語訳は宮下 (2006: 27) による。

(16) ただし構造スコープ度は6つのうちもっとも批判・反論の多いパラメータである。Vgl. Girnth (2000: 89ff.), Norde (2009: 126ff.).

(17) Vgl. Traugott (2004), 秋元 (2004).

(18) Norde (2002) ではスウェーデン語の名詞句や特殊な形容詞の弱語尾を外適応との関係で分析しているが、スウェーデン語では語形の入れ替えや再利用があっても、そこからなにも新機軸はできていないので、外適応とはよべないとしている (Norde (2002: 53)).

【参考文献】

- (Akimoto, Minoji) 秋元実治 (2004) 「文法化」秋元実治 (編) 『コーパスに基づく言語研究 文法化を中心に』東京1-38.
- Askedal, John Ole (2008): 'Degrammaticalization' versus typology: Reflections on a strained relationship. In: Þórhallur Eyþórsson (Hrsg.) Grammatical change and linguistic theory. The Rosendal papers (= *Linguistik Aktuell* 113). Amsterdam/Philadelphia, 45-77.
- Auwers, Johan van der (2002): More thoughts on degrammaticalization. In: Ilse Wischer/Gabriele Diewald (Hrsg.) *New reflections on grammaticalization* (= *Typological Studies in Language* 49). Amsterdam/Philadelphia, 19-29.
- Beaudoin-Lietz, Christa/John L. Plews (2010): Co-Occurring Attributive Adjectives in German: Presenting a Special Case of Alternations of Strong and Weak Inflections. In: *Forum Deutsch* 18.1. <http://www.forumdeutsch.ca/f/nf9catg>, 23.9.2011.
- Behagel, Otto (1923): *Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung*. Bd. 1. Die Wortklassen und Wortformen. Heidelberg.
- Braune, Wilhelm (1987): *Althochdeutsche Grammatik*. Tübingen.
- Brinkmann, Hennig (1969): Das deutsche Adjektiv in synchronischer und diachronischer Sicht. In: *Wirkendes Wort* 19, 94-104.
- Demske, Ulrike (2001): Merkmale und Relationen. *Diachrone Studien zur Nominalphrase des Deutschen* (= *Studia Linguistica Germanica* 56). Berlin/New York.
- Diewald, Gabriele (2010): On some problem areas in grammaticalization studies. In: Katerina Stathi/Elke Gehweiler/Ekkehard König (Hrsg.) *Grammaticalization. Current views and issues* (= *Studies in Language Companion Series* 119). Amsterdam/Philadelphia, 17-50.
- Ebert, Robert Peter/Oskar Reichmann/Hans-Joachim Solms/Klaus-Peter Wegera (1993): *Frühneuhochdeutsche Grammatik*. Tübingen.
- Girnth, Heiko (2000): *Untersuchungen zur Theorie der Grammatikalisierung am Beispiel des Westmitteldeutschen* (= *Reihe germanistische Linguistik* 223). Tübingen.
- Haspelmath, Martin (2004): On directionality in language change with particular reference to grammaticalization. In: Olga Fischer/Muriel Norde/Harry Perridon (Hrsg.) *Up and down the cline - The nature of grammaticalization* (= *Typological Studies in Language* 59). Amsterdam/Philadelphia, 17-44.
- Hotzenköcherle, Rudolf (1968): Gegenwartsprobleme im deutschen Adjektivsystem. In: *Neuphilologische Mitteilungen* 69, 1-28.
- Kern, Peter Christoph/Herta Zutt (1977): *Geschichte des deutschen Flexionssystems* (= *Germanistische Arbeitshefte* 22). Tübingen.

- Lehmann, Christian (2002a): New reflections on grammaticalization and lexicalization. In: Ilse Wischer/Gabriele Diewald (Hrsg.) *New reflections on grammaticalization* (= *Typological Studies in Language* 49). Amsterdam/Philadelphia, 1-18.
- (2002b): *Thoughts of grammaticalization*. Second, revised edition. (= *Arbeitspapiere des Seminars für Sprachwissenschaft der Universität Erfurt* 9). Erfurt.
- Meillet, Antoine ([1912] 1921): *L'évolution des formes grammaticales*. In: Antoine Meillet: *Linguistique historique et linguistique générale*. Paris: 130-148. (甲斐崎由典(訳) (2006) 「文法形式の発達」『*Travaux du Cercle linguistique de Waseda* 10』 61-80.
<http://www.venus.dti.ne.jp/~kaisaki/gengoken/pdf/vol10/10kaisaki.pdf>)
- (Miyashita, Hiroyuki) 宮下博幸 (2006) 「文法化研究とは何か」『*Travaux du Cercle linguistique de Waseda* 10』 20-47.
- Norde, Muriel (2010): *Degrammaticalization. Three common controversies*. In: Katerina Stathi/Elke Gehweiler/Ekkehard König (Hrsg.) *Grammaticalization. Current views and issues* (= *Studies in Language Companion Series* 119). Amsterdam/Philadelphia, 123-150.
- (2009): *Degrammaticalization*. Oxford/New York.
- (2002): *The final stages of grammaticalization: Affixhood and beyond*. In: Ilse Wischer/Gabriele Diewald (Hrsg.) *New reflections on grammaticalization* (= *Typological Studies in Language* 49). Amsterdam/Philadelphia, 45-65.
- Paul, Hermann (1998/24): *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Tübingen.
- Ramat, Paolo (1981): *Einführung in das Germanische* (= *Linguistische Arbeiten* 95). Tübingen.
- Ronneberger-Sibold, Elke (2010a): *Die deutsche Nominalklammer. Geschichte, Funktion, typologische Bewertung*. In: Arne Ziegler (Hrsg.) *Historische Textgrammatik und historische Syntax des Deutschen. Traditionen, Innovationen, Perspektiven*. Berlin/New York, 85-120.
- (2010b): *Der Numerus - das Genus - die Klammer. Die Entstehung der deutschen Nominalklammer im innergermanischen Vergleich*. In: Antje Dammel/Sebastian Kürschner/Damaris Nübling (Hrsg.): *Kontrastive Germanistische Linguistik* (= *Germanistische Linguistik* 206/209). Teilband 2. Hildesheim/Zürich/New York, 719-748.
- Sahel, Said (2005): *Die Variation der Adjektivflexion nach Pronominaladjektiven und einige ihrer Determinanten*. In: *Deutsche Sprache* 33, 355-381.
- Sonderegger, Stefan (1979): *Grundzüge deutscher Sprachgeschichte. Diachronie des Sprachsystems. Bd. 1: Einführung · Genealogie · Konstanten*. Berlin/New York.
- Szczepaniak, Renata (2010): *Wird die deutsche Nominalphrase wirklich analytischer? Zur Herausbildung von Diskontinuität als synthetische Verdichtung*. In: Dagmar Bittner/Livio Gaeta (Hrsg.) *Kodierungstechniken im Wandel. Das Zusammenspiel von Analytik und Synthese im Gegenwartsdeutschen* (= *Linguistik - Impulse & Tendenzen* 34). Berlin/New York: 123-136.
- (2009): *Grammatikalisierung im Deutschen. Eine Einführung* (= *Narr Studienbücher*). Tübingen.
- Törnqvist, Nils (1974): *Zur Geschichte der deutschen Adjektivflexion*. In: *Neuphilologische Mitteilungen* 75: 317-331.
- Traugott, Elizabeth Closs (2004): *Exaptation and grammaticalization*. 秋元実治(編)『*コーパスに基づく言語研究 文法化を中心に*』東京133-156.
- Wiese, Bernd (2004): *Zur Systematisierung der Schwankungen zwischen starker und schwacher Adjektivflexion nach Pronominaladjektiven*. <http://www.ids-mannheim.de/gra/texte/wi5.pdf>, 23.9.2011.